



名前を言わない戦争 ——終わらないコンゴ紛争——

ジェイソン・K・スターンズ 著

武内進一 監訳 大石晃史・阪本拓人・佐藤千鶴子 訳

東京 白水社 2024年 346+lxx p.

本書は、Jason K. Stearns による *The War That Doesn't Say Its Name: The Unending Conflict in the Congo* (Princeton: Princeton University Press, 2021年) の全訳である。原著者のスターンズは、国連やNGOの調査員としてコンゴ民主共和国（以下、コンゴ）で20年にわたり調査研究に従事した経歴を持ち、現在はカナダのサイモンフレイザー大学で教鞭をとっている。本書に先立つ2011年には同じくコンゴの紛争を扱った *Dancing in the Glory of Monsters: The Collapse of the Congo and the Great War of Africa* (New York: PublicAffairs) を上梓している。2011年の書籍は、1990年代に起きた2度のコンゴ戦争（1996～97年の第1次コンゴ戦争、1998～2003年の第2次コンゴ戦争）を分析した。対して本書は、第2次戦争が終結した後のコンゴ東部に焦点を当て、移行期間が終了して選挙を実施した後になっても、東部ではなぜ紛争が終わらないのかを論じている。

コンゴ東部で暴力が継続する理由を解き明かすにあたり、著者は、この紛争に関与する主要な当事者としてコンゴ国家とルワンダ国家、主要な武装勢力とその支持基盤、さらにドナーを中心とする国際社会という3つの行為主体に注目する。そして、各主体の構造と利益を詳細に検討し、コンゴ国家がいかに東部の紛争に対して無関心であり続けるのか、それとは対照的にルワンダ国家がこの地域に密接に関与し続けてきたのはなぜかを説明する。また、著者が「軍事的ブルジョワジー」と呼ぶ、紛争を生きる術とする軍人と政治家のグループが30年におよぶ紛争を通じてこの地域に出現するに至った過程を紐解く。さらに、2003年に第2次コンゴ戦争が終結した後にドナーが採用した平和構築モデルの問題点を検討する。

2020年には120以上の武装勢力が存在するなど、コンゴ東部は武装勢力の多さで知られ、その事実だけで、もはや理解は不可能だと思わしき人もいるかもしれない。だが、少なくとも東部の南北キヴ州の紛争に関しては、本書で言及される武装勢力の数は限定されており、アルファベットの略語表記に悩まされずに読み進めることができる。著者が同地域における和平プロセス破綻のきっかけと考える人民防衛国民会議（CNDP）と後継の3月23日運動（M23）については、武装勢力がたどった軌跡のみならず、指導者の生い立ちを含めた詳細な考察がなされている。本書は、第一義的にはコンゴ東部の紛争を説明するために執筆されたものであるが、コンゴに限らず、アフリカ諸国の歴史や紛争研究全般に興味を持つ人びとにもぜひ手に取っていただくと、本書の翻訳に携わった者として大変嬉しく思う。

佐藤 千鶴子（さとう・ちづこ／アジア経済研究所）

